21　「保元物語」─中世の軍記物語

20年度　成蹊大学

★　次の文章は『保元物語』の一節で、出家したが讃岐に流された崇徳院を訪れる場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

　その後、鳥羽院のなりける紀伊守範通と言ひし者、道心を発し、出家遁世して、蓮誉と名乗りて、諸国一見の聖となりたりけるが、在俗の時はにて、のに参りけるに、それかそれにあらざるほどにて、御目にかかるまではなけれども、新院の御事伝へ承りてあはれにゆかしくおぼえければ、との潮路に赴き讃岐に訪ね参りたり。

　御所の体を見奉れば、目も当てられずあさましげなる御有様なり。「宮門を守り、道を塞げり。花鳥風月の興あるべき所ならねば、何事にかは御心を慰ませたまふべき。雪の、雨の夜、あはれをも誰かはとぶらひ参るべき」と、思ひ続けて、藤の衣の袖れはててぞ立てりける。あひかまへて、御所の内へ入らんとうかがひけれども、の兵士きびしかりければ、空しく御所のあたりを立ち舞ひ立ち舞ひしけれども、「あれは」とだにも言ふ人もなし。僅かに音する物とては、岸打つ浪、松吹く風、沖のの誘ふ声、うらやましくぞおぼえける。日暮れ、夜に入るままに、いとど心も澄み渡りければ、笛吹き、朗詠して、泣く泣く心を慰みけり。

　Ａ　不窮　無人之処

　　　愁腸欲断　閑窓有月之時

　月のの浪の音、の棹のいづくをそことは知らねども、浦吹く風にたぐひ来て、心細さは限りもなし。

　夜の更け行くままに、月傾き、風しかりけれども、ただつくづくと立ちて、袖を絞りける処に、黒ばんだる水干打ち掛けたる人、月に誘れけるにや、御所の内より立ち出でたり。蓮誉、嬉しくおぼえて事の心を嘆きければ、この人、あはれみて、連れて紛れ入りにけり。蓮誉、御所へ参るべきならねば、板に一首の歌を書きて、これ天聴に達してたまはらん」と言ひければ、この人、情けありけるにや、この由を奏する程に、新院なりけるに、一首の歌をぞ書きたりける。

　Ｂ　朝倉や丸殿に入りながら君に知られで帰る悲しさ

　院もあはれに思し召しければ、「御前近う召されて、都の事を聞し召し、昔のゆかしさをたづねばや」と思し召されけれども、それもさすがにて、ただ御返事ばかりぞありける。

　朝倉やただいたづらに返すにも釣りする海士の　　Ｘ　　をのみぞ泣く

　蓮誉、これを賜りて、の底に納め、泣く泣く都へ上りけり。

注１　北面＝北面の武士。院の警護をした。

注２　陪従＝神楽を演奏するの楽人。

注３　幽思＝もの寂しい思い。

注４　深巷＝草深い路地裏。

注５　木の丸殿＝丸木造りの粗末な宮殿。

問１　傍線部（１）（３）（９）の解釈として最も適当なものをそれぞれ一つ選べ。

（１）　あはれにゆかしくおぼえければ

　１　しんみりと切なく気がかりなことにお思いになったので

　２　なんとなく趣深く自分の目でも確かめたいと思ったので

　３　そこはかとなく感動的で行ってみたいとお思いになったので

　４　しみじみと悲しく心ひかれるように思われたので

　５　かえって哀切極まる感じで気がかりに思われたので

（３）　あさましげなる

　１　みすぼらしそうな　　　　　２　感動するほかないような

　３　とてもすばらしい　　　　　４　元気がなさそうな

　５　あきられてしまうような

（９）　たづねばや

　１　質問したからか　　２　訪問してほしい

　３　質問したい　　　　４　訪問できるなら

　５　訪問しようか

問２　傍線部（２）「讃岐」は現在の何県に相当するか。正しいものを次の中から一つ選べ。

１　大分県　　２　岡山県　　３　島根県

４　香川県　　５　高知県

問３　傍線部（４）「誰かはとぶらひ参るべき」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

１　花鳥風月を愛でられるような御所の様子ではないので、雪の朝や雨の夜などであっても誰も訪問する者はいないにちがいない。

２　予想に反して御所はすばらしい場所にあるが、いったいどのような人が雪の朝や雨の夜などにやって来るのだろうか。

３　門番の武士が厳しく御所の周りを警護しているので、雪の朝や雨の夜などの特別な場合でなければ誰も近づけないにちがいない。

４　花鳥風月の情趣に富んだ風流な土地でどんな景物に接しても心が癒されるため、御所への訪問者が跡を絶たないにちがいない。

５　武士たちによって御所は厳重に警護されているが、これでは心の癒しを求めてやって来た人もすぐに帰ってしまうのではないだろうか。

問４　Ａの詩句について、（ｉ）（ⅱ）（ⅲ）の問いに答えよ。

　　（ⅰ）　波線部「不」と同じ訓で読む漢字を次の中から一つ選べ。

　　　１　勿　　２　弗　　３　令　　４　須　　５　被

　　（ⅱ）　後半部の書き下し文として正しいものを次の中から一つ選べ。

１　断腸の欲を愁へんは　閑窓より月にこれ有る時

２　愁腸に欲を断たんは　閑窓にこの月有る時

３　愁腸を断たんと欲す　閑窓の月に有るの時

４　愁腸に欲を断たんは　閑窓の有月に之く時

５　愁腸を断たんと欲す　閑窓に月有るの時

（ⅲ）　蓮誉が朗詠したのがこの詩句であったのはなぜだと考えられるか。その理由の説明として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

１　岸打つ浪や松吹く風によって人恋しさが募り、花鳥風月を詠んだ詩句の内容に憧れを抱いたから

２　人気もなく月が照っている今の荒涼とした状況が、同じような内容を持つ詩句を想起させたから

３　日が沈み夜に入るにつれ寂しさが増してきたので、勇壮な詩句を朗詠して気持ちを鼓舞しようと思ったから

４　物寂しい気持ちが尽きないと詠む詩句の内容が、崇徳院の今後を暗示しているように感じられたから

５　月の光に照らされて涙を流す悔しさは、和歌ではとても表現できないと考えたから

問５　傍線部（５）「れ」と同じ意味で用いられているものを次の中から一つ選べ。

１　硯に髪の入りてすられたる。

２　恐ろしくて寝も寝られず。

３　世は憂きものなりけりと思し知らる。

４　かくてもあられけるよ。

５　かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。

◎問６　傍線部（６）「事の心」とあるが、蓮誉はどのようなことを嘆いたと考えられるか。四十字程度で説明せよ。

　　［

］

問７　傍線部（７）「これ天聴に達してたまはらん」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

１　自分が崇徳院と面会する天皇の許可がほしい。

２　自分に代わって崇徳院に返歌してほしい。

３　自分が会いに来たことを崇徳院に伝言してほしい。

４　自分の詠んだ和歌を崇徳院に伝えてほしい。

５　自分が和歌を詠んだ事情を崇徳院に察してほしい。

問８　Ｂの和歌の説明として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

１　「朝倉や」と呼びかけて崇徳院への贈歌にふさわしい重々しさを演出している。

２　序詞を用いてわびしい生活を強いられる崇徳院を思いやっている。

３　讃岐でのわび住まいを続ける崇徳院の悲しさを代弁している。

４　崇徳院に対面することなく引き返すやるせなさを素直に詠んでいる。

５　崇徳院に出会ってすぐに帰る慌ただしさを嘆いている。

問９　傍線部（８）「聞し召し」の説明として正しいものを次の中から一つ選べ。

１　尊敬の本動詞で、蓮誉の敬意を表している。

２　尊敬の本動詞で、崇徳院に対する敬意を表している。

３　尊敬の補助動詞で、崇徳院の敬意を表している。

４　謙譲の本動詞で、崇徳院に対する敬意を表している。

５　謙譲の補助動詞で、蓮誉の敬意を表している。

問10　空欄Ｘに入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

　　１　下　　２　声　　３　木　　４　目　　５　音

◎問11　次のうち、問題文の内容に合致するものはどれか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

１　出家して諸国一見の聖となっていた蓮誉は、訪問先の讃岐で崇徳院の噂を耳にして急いで御所に駆けつけた。

２　讃岐でわびしい生活をしていた崇徳院は、蓮誉と和歌を贈答するなどして夜を徹して語り合った。

３　人目を忍んで讃岐の御所を訪れた蓮誉は、崇徳院に面会はできたものの、和歌を贈答しただけで都に返されてしまった。

４　蓮誉の和歌に心動かされた崇徳院は、和歌を贈答しあうことで心の交流をはたした。

５　崇徳院救出のために讃岐に向かった蓮誉は、警護が厳重だったため和歌を詠んで思いを届けようとした。

問12　『保元物語』は軍記物語である。次の中から軍記物語を一つ選べ。

１　源氏物語　　２　沙石集　　　３　太平記

４　大鏡　　　　５　梁塵秘抄

【解答】

問１　（１）＝４　（３）＝１　（９）＝３

問２　４

問３　１

問４　（ⅰ）＝２　（ⅱ）＝５　（ⅲ）＝２

問５　１

問６　Ａ配流された崇徳院を見舞うために御所を訪れたが、Ｂ警護が厳重で中に入れないこと。（38字）

評価の基準　Ａ＝５〔「崇徳院に会いに来た」という内容があればよい。〕

Ｂ＝５〔「御所に入ることができない」という内容があればよい。〕

問７　４

問８　４

問９　２

問10　５

問11　４

問12　３

【現代語訳】

　その後、鳥羽院の北面の武士であった紀伊守範通といった者が、心をおこして、出家遁世して、蓮誉と名乗って、諸国を（修行のため）ひとわたり見て回る高僧となったが、（蓮誉は）出家する前は、神楽を演奏する地下の楽人であって、内侍所の御神楽に参上したときに、（蓮誉は）それほどではない身分であって、（崇徳院に）お目にかかるほど（の身分）ではなかったけれど、新院のご事情を伝え聞き申し上げて、しみじみと悲しく心ひかれるように思われたので、はるばるとはるかな海路に向かい、讃岐に（崇徳院を）訪ねて参上した。

　御所の様子を拝見すると、目も当てられず、みすぼらしそうな御有様である。「荒々しい武士が門を守り、いばらが道を塞いでいる。花鳥風月の趣があるはずの所でもないので、どんなことで（崇徳院は）お心をお慰めになることができるだろう（いやお心をお慰めになることができるものは何もない）。雪の朝、雨の夜（その他の）、しみじみとした情趣（など）をも、誰が訪問して参上（してともにめでることを）するだろう（いや誰も訪問して参上しない）」と、（蓮誉は）思い続けて、藤の衣（＝粗末な衣服）の袖が（涙で）すっかり濡れそぼって立っていた。よく注意して、御所の内側へ入ろうと（様子を）探ったけれど、門を守護する兵士（の警備）が厳重であったので、むだに御所のあたりを舞うように目まぐるしく動き回ったが、「あなたは（何をしているのか）」と言う人さえもいない。わずかに物音がするものとしては、岸を打つ波、松を吹く風、沖の鷗が誘う（ように鳴く）声が（聞こえて）、（そんな物音でさえ）うらやましく思われる。日も暮れ、夜に入っていくにつれて、いっそう心が物静かに落ち着いたので、笛を吹き、朗詠して、泣く泣く心を慰めた。

　幽思窮まらず　深巷に人無きの処（＝人がいない草深い路地裏で　もの寂しい思いは果てない）

　愁腸を断たんと欲す　閑窓に月有るの時（＝寂しく見上げる窓に月が見える時　愁いのために腸がちぎれそうだ）

　月の出とともに満ちてくる波の音、一人旅で舟をこぐ棹（の音）がどこで（するのか）わからないが、浦を吹く風に連れ立って（聞こえて）来て、心細さはこの上もない。

　夜が更けていくにつれて、月は傾き、風は澄み切って清らかであったが、（蓮誉が）ただじっと立って、（涙で濡れそぼった）袖を絞っていたところに、黒ずんだ水干をひっかけた人が、（美しい）月に誘われたのであろうか、御所の内側から出てきた。蓮誉は、嬉しく思われて、事情を嘆いたところ、この人は、（蓮誉を）気の毒だと思って、（御所に蓮誉を）連れて紛れて入った。蓮誉は、（御所に入ったものの、身分が低くて）崇徳院（のもと）に（直接）参上できないので、板に和歌を一首書いて、「これを天に届けていただきたい（＝自分の詠んだ和歌を崇徳院に伝えてほしい）」と言ったので、この（黒ずんだ水干をひっかけた）人は、（蓮誉への）思いやりがあったのだろうか、この事情を奏上したときに、崇徳院がご覧になったところ、一首の和歌が書いてあった。

　かつて斉明天皇が新羅遠征の折に木の丸殿を造った朝倉ではないが、あなたの丸木造りの（粗末な）宮殿に入ったものの、あなたに知られずに帰る悲しさよ。

　崇徳院もしみじみと心をお動かしになったので、「御前近くに召し寄せて、都のことも聞いて、昔の心ひかれる（宮中での思い出話などの）ことも質問したい」とお思いになったけれど、それもそうはいってもやはり（はばかられて）、ただお返事だけが（蓮誉へ）あった。

　かつて斉明天皇が新羅遠征の折に木の丸殿を造った朝倉ではないが、（この粗末な宮殿に来てくれたあなたを）ただむなしく帰らせることになったのにつけても、釣りをする海士が声を出して泣くように、私も悲しくただただ泣くばかりだよ。

　蓮誉は、これを頂戴して、笈の底に納めて、泣く泣く都へ上った。